

『さくら紀行』

— 桜樹と桃源郷 —

佐倉尚紀

インターネットを立ち上げたら、冒頭に「さくら紀行」なる大きな文字が飛び出してきた。一瞬、「んんっ・・・」と思ったらそれは、「桜を旅する」方の「さくら」だった。

私とさくら（こっちは犬の名前）の散歩コースに河川敷土手沿いを整備したミニミニ公園がある。元総理大臣の揮毫石碑やブランコ、すべり台、休憩用のコンクリートで出来た椅子やテーブル、それに水呑場やトイレも備えられており、小さいながらも市民の憩いの場となっている。樹木は桜の木が主体でその他ツツジや雪椿が垣根代わりに植えられている。桜はおよそ七十本くらいだろうが、毎年四月には散歩の目を楽しませてくれる。夜は夜でライトアップされた桜がまた面

白い。天候に恵まれた四月十三日・日曜日の午後、そこを通ったら、いくつもの花見の宴が盛り上がっていた。

私がインターネットを開いたのはこんな光景を眺めた後のことである。短時間で花見が出来しかもこれは凄いと思える所をネット上で探し歩いた。そしてここで見つけたのが、桜の日本三大名木に数えられている福島県田村郡の「三春の滝桜」。今ひとつは、福島市内にあり、現代の桃源郷’とも言われる「花見山公園」、この二つに焦点を絞った。ここなら夕方まで十分戻ってこられる。開花情報、天気予報それに地図情報とインターネットは何でも教えてくれる。出かける日を四月十九日土曜日に決めた。天気予報もこの日の午後までは晴れ模様とのこと。

経路の概要は、つぎの通りである。  
自宅↓新津IC（磐越道）↓：会津若松IC↓船引三春IC↓三春滝桜  
↓郡山東IC ↓郡山JC↓（東北道）↓：福島西IC↓花見山公園

その朝、天気は上々。かわいそうだが「さくら」は留守番にまわってもらおうことにした。さくらが、みんな行ってしまうのか、と不満を抱くときの特徴である、小首を傾け目の上あたりにシワをつくり顔を曇らせていた。滝桜は地図を見ると「さくら湖」のすぐ傍。「さくら」を残して「さくら湖」を目指す。

こうして家族四人、朝六時に出発進行！

家から三十分程の新津インターから磐越道に乗った。行き先インター船引三春まで一四三km。高速道路は時間も早いせいか順調に進んだ。山間部にさしかかると時々霧がかかってきた。会津に入ってから磐梯山を横目に車の少ない高速を快調に走り続ける。

八時少し前、三春インター近くで今日初めての渋滞に巻き込まれた。一つ手前の郡山東インターで降りていけばとじじたる思い。あそこでは車の列は無かった。船引三春は常磐道からいわき経由で来る車との合流地点になっていたのだ。

郡山東インターから滝桜まで約十五km。船引三春からは約八kmで比較的分かりやすそうな道だと事前に調べていた。混むから早い時間帯をと体験者のアドバイスもあつたのだが、今となってはしようがない。料金所を出るまでなんと三十分もかかってしまった。

インターを出た288号線は、先ほどの車がどこへ消えたのかと思えるほど空いていた。途中で「滝桜はこちら」の看板のとおり左折し道なりに直進した。

土地柄なのか道路沿いには枝垂桜があちこちで目につく。安堵もつかの間、目的地が近くなるにつれ、またもや渋滞が始まり、待つては一台分くらい前に進みの繰り返しでノロノロ運転にジリジリしてきた。歩いている人の方が早かった。ここでやはり三十分くらい時間を無駄に費やしただろうか。

緩い上り坂を登り切ったとき、右手に人の群れが大きな円形状になって、ひとつの方向に身体を向けていた。かなり離れてはいたが窪んだ傾斜地に、大きな樹形が目に入った。

私が子供の頃は、まだ東京という大都会に憧れがあり、東京という言葉や文字に強く惹きつけられた時代だった。就職で東京に行く人を羨ましがったり、中学生の頃、新任の先生が東京の大学を出たと紹介されるとオオーっという声があがった程だった。また上京列車が上野駅に着くと、ああこれが東京の香りかと思ったり、長じて初めて富士山の姿を眺めたときには、その雄大な裾野に胸がジーンとした。また初の超高層ビルを眺めたときや、さらに言えば昔、神奈川県大船の近くに住んでいた頃、松竹撮影所で寅さん一家を見たとき、しかも可愛い倍賞千恵子さんと、肩を触れ合う位の通路で目と目を合わせながらすれ違ったときの胸のときめき等等など。それは地方に生まれて、汽車で八時間もゆられながら、東京に出た原体験のある者にだけわかることかも知れない。

滝桜の姿が遠目で見えたとき、まさにそうした場面に遭遇した瞬間と同じくら

いの興奮と喜びと新鮮さが感じられたのである。

今までわざわざ桜を眺めに旅に出たことは無かった。毎年、花見会はやってるが、花よりダンゴの口で花に係りの無い畳の上が多い。それに桜はタイミングが非常に難しい。満開の時期が休日でもしかも天候に恵まれるという三条件揃うことが求められるから、出かけるのもつい億劫になってしまうのだ。

早く滝桜の傍に行きたいと思っても、車は相変わらずノロノロとしか動けない。ようやく駐車場に落ち着いたのは、三春の料金所を出てから一時間十分後の、九時四十分であった。八kmの距離からしたら、随分無駄な時間がかかってしまった。

近づけば、大地に思う存分根を張った太い幹、太いが故に痛々しいくらい大きくえぐられたように分かれた幹そしてそこから派生した枝、風雪に耐えた堂々たる迫力と円熟した渋み、風格を備えた桜樹だった。今日この天候に恵まれた日に

満開を迎えたばかりの最高潮に達した桜花だった。芝居にも人生にも全てに頂点はあるが、この日が滝桜にとつて最も華々しい日だったのでないだろうか。まさに桜樹のカリスマである。

花径はふだん見慣れたソメイヨシノより小さ目ではあるが、地上に散り落ちる幾重もの光り輝やく花火のように見えた。花一つひとつというよりも、幹、枝、花ら全体像の素晴らしさであろうか。樹齡千年といわれているこの歴史の重みもある。私は、西暦一〇〇〇年代の人々と、同じ目線で桜樹の花を眺めていることを思うと、歴史がすぐ目の前まで縮まってきたように感じた。

司馬遼太郎氏の「峠」に出てくる主人公は、越後長岡藩の河井継之助だが、長岡藩といえば、小泉総理が施政演説で触れた「米百俵」のゆかりの藩である。この藩士が一八〇三年一月二七日（旧暦）雪化粧していたであろう滝桜を眺めたことが日記に載っている。河井継之助生誕二四年前のことである。

「・・・其木末美しく四方に垂れてた

とへばきぬ笠を開きたるごとく・・・」と記してある。（陸奥の綱笠下巻：長沢茂好・柳町年綱日記Ⅱ長岡市立中央図書館所蔵）

当日は「日和よし」と記してあるが、前日、前々日の近郷は大吹雪だった。

幕末に向かっている時代、さくら紀行、など長閑なものではなく、「人目を忍ぶ旅なれハ、姿をかへ、笠かたふけつゝ、後の睦月の十日といふに、越の新潟をたち・・・」（前出上巻）と、いわば藩政活動の一環で東奥を探りに訪れた際、偶然目についたのだろう。

ちなみに、一八〇三年は、将軍「徳川家斉（いえなり）」五十年間に及ぶ長期政権の六年目のころである。「大奥物語」ではないが、浪費癖の風潮が蔓延していた。家斉自身、側室の数も子供の数も数十人いたという。また、目を外に転ずれば、外交的には、「ロシア」が日本に通商を持ちかけていた時代でもある。

当時の長岡藩政がどうであったかは知らないが、くだんの藩士が、仮に満開の桜花を見たとしたら、どのように心に

留めただろうか。「咲きつつも 何やら花の さびしきは

散りなん後を 思う心か」（吉川英治著「宮本武蔵」の吉野太夫のごとき、心境になったのではなからうか。六十数年後、長岡藩は北越戦争で敗れ多くの藩士が散ってゆくことになる。

二百年前に季節こそ冬と春の違いはあれど、郷里の先輩が同じ桜を眺めている連帯感をあらためて感慨深く思った次第である。

周遊道を一周しながら、下から上からじっくりと滝桜を觀賞することが出来た。いつの日か、親父もこれを、祖父もこれをと、自分の子や孫・曾孫達が思う姿を想像したら、この桜樹に生命の連鎖というものを感じた。

駐車場に向かう途中、露店が並ぶ人混みの道で突然、中型犬の雑種と大型犬のゴールデンが取っ組み合いしそうな勢いで吠えあつた。小さい方が先に吠えたのに対抗したのだが、ゴールデンの女性飼主がオスワリをさせ、両手で口先を抑

え「吠えたらダメでしょう」と説教した。その後、くだんのゴールデンは妙な顔で飼い主に従い静々と歩いていった。吠えあった時との落差が、すごく可笑しくまた可愛らしくもあり、つい留守番の「さくら」を思い浮かべてしまった。

駐車場を十時五十分に出発。

穏やかで春の長閑さを映した、さくら湖を左に見やりながら、次の目的地である「花見山公園」に向かった。

郡山東インターから高速に乗り、福島西インター（高速区間距離およそ四二km）を出たのが十一時五十分。すぐ右折して115号線を直進。しばらく走った後、車の多い4号線を北上。

花見山への看板を見て次の信号を右折すべきところをうっかり直進、市街の信号がやたら多く見間違ってしまった。幾分遠回りになったが、初めての地のドライブは得てしてこういうことが付きもの。看板に従って道なりに進むと、やはりここでも渋滞がおこっていた。

やがて広い駐車場が見えてきた。観光

バスや市営バスも含めかなりの車が駐車しており、2、3台づつ係員が誘導している。ようやく車を落ち着かせたのが、十二時五十分。インターを出てから一時間もかかってしまった。

人の流れに従って右側の遊歩道を歩いた。

通り道には「春」がいた。そして前方には高くはない山のあちらこちらが、春色に染められた綿飴のごとくふんわりとしている。時折、桜の花びらが風に乗って舞ってくる。桜吹雪を味わいながらゆっくり進んだ。樹木の下ではグループそれぞれの模様で憩う風景が見られる。だんだんと人足が減り我々家族と数組だけになった。左手の離れた山腹に人の動きを見たとき、そこに辿る道はここじやないことに気がついた。前の組も引き返してくる。花見山の本コースは途中で分かれた左側の道だった。うっかりするくらい、遊歩道の花々と左右の山の彩りに気を取られていた。

本コースの入り口に、ボランテアの

ガイドさんが居られたので、濃いピンクの花が桜なのかどうか尋ねたら、「あれは花桃です。切花用ですから実はなりません」。ついでに「この白いのは白モクレン」と丁寧に教えてくれた。一つひとつ花の名前が分かっただらもうと楽しいだろうに、紅を帯びた桜と桃の区別さえ良く知らないのだ。またガイドさんは、この花見山は阿部さんという個人が所有している山で、無料で開放してくださっているとも付け加えた。案内所にあった花見山のガイドマップをもらい、この地で咲く花の写真をあらためてながめなおした。

入り口の石碑と池の脇を通って遊歩道があった。自宅の縁側には遊客がてんで勝手に座ってあたりを眺めている。

少し上には畑一面、赤白黄のチューリップが咲いていた。それを左に見ながら登ってゆくと遊歩道は所々幾つかに分かれている。そのため人混みの割にここでは渋滞も無く眺め歩くには快適であった。彼岸桜がピンクで枝枝を着飾っている。風が枝を踊らせると花吹雪となり顔や肩

に降りかかる。幾度となく舞い落ちた花びらで、足もとがピンク色に染まっていた。頭上の桜樹のどこかでウグイスの声が出た。傾斜地の上も下も目に見えるは色づくし。

中腹から見下ろすと福島市街が小さく見え、前方遙か彼方には吾妻連峰、そこにはまだ雪化粧を残した吾妻小富士の姿もはつきり見えた。

近景の山肌は桜の濃淡のピンクと花桃の濃い目のピンクで、霧が立ち込めたように見える。この時期はやはり桜と桃が主役だ。そこに黄色のレンギョウやサンシュユらがアクセントをつけている。もやもやしたピンク色の不思議なあでやかさは、'水墨画'のようにも見える。この地が桃源郷と言われたことに納得した。

桜の花が満開を迎え、そしてさらさらと春風の音に乗って散りゆく様を、その瞬間の風情を、ものの見事に花見山は表現し、私たちを癒してくれた。そして、綺麗なものを綺麗と、美しいものを美しいと素直に感ずる心を引き出してくれた。

時間が気になり（帰宅後六時から別用件あり）中腹までの遊歩であったが、春の花見山を存分に楽しむことができた。それにしても何回も繰り返しになるが花吹雪の中を歩くのは実に気持ちのいいものだった。

総括すれば、滝桜はカリスマ的な個体美であり、花見山はマスゲームの集団美。滝桜・花見山どちらでもいいから、じつくりのんびり握り飯をほおぼりながら過ごす方法も良いのではと思った。

十四時四十分駐車場を出発。初めての“さくら紀行”、空は私たちが花見を終えるまで我慢してくれた。

福島西インターに入ったのが十五時。わずか二十分ということは、往路は遠回りと渋滞で四十分もロスタイムがあったことになる。

安達太良SAで小休止した後、郡山JCから磐越道に抜け一路新潟方面へと走った。空には鉛色の雲が張り出し、磐梯山が望める頃には雨足も徐々に強まって

きた。

我が家に着いたのが十七時四十分。走行距離四五〇km、所要時間十一時間四十分の小旅行。留守番の「さくら」も機嫌よく元気に尻尾を振り出迎えてくれた。

“ダンゴ良し

さらに花良し

春の味”

完

(注) 二〇〇三年四月十九日のこと